

第37回

北海道ジュニア体操競技選手権大会審判員報告

平成26年度全道ジュニア大会報告書「体操競技男子」

男子審判長 吉田義経

第37回を北海道ジュニア体操競技・新体操選手権大会は、10月24日(金)～26日(日)に北海道立野幌総合運動公園体育館にて開催されました。

体操競技男子はBクラスが2種別、Cクラスが2種別となり、3クラス5種別でおこなわれるようになってから7年目を迎えました。

今年度からの大きな試みとしまして、全種別全種目において、終末の着地を決めた選手に0.1の加点を与えることとしました。これは、将来体操競技を続けていく上で必ず必要で大切な要素である着地をこのジュニア期から意識して取り組んでもらいたいとの審判委員会・強化委員会共通のものであります。

この大会の特徴としましては、各クラブの出場人数と全体の出場人数の比において各クラブから審判員を派遣する派遣審判員制を導入している大会であります。

全道大会においては、毎年北海道体操連盟審判委員会や強化委員会で反省し、その反省を次年度に改善していくような取り組みをしています。その中で、この全道ジュニアの大会における問題点、改善点が毎年出てきている状況でありますので、今年度はこのような審判員報告という形で皆様と共通理解を図るような取り組みをしてみました。

内容としましては、おもに各種目ごとにどのような観点で採点にあたっているか、選手・指導者に気をつけて取り組んでもらいたいことなどを記入しております。次年度に向けた変更点や補足説明も載せてあります。選手・監督・審判員・関係者で共通理解を図るとともに、北海道の体操の発展、活性化につながることを期待いたします。

【 ゆか 】

主審 関村 卓弥

一審 松本 裕也

二審 徳井 翔一

計時線審 大北 隆治

線審 高山 宇宙

【種目全体を通して】

ゆかでは、例年どおり「倒立静止」を厳密に評価し序列をつけた。倒立の不成立については規定演技は配点の半分減点や、自由演技は特別要求なし及び実施減点とし、2秒完全静止をおこなった選手については加点を与えた。着地においても同様の格差をつけた。

難しい技への挑戦に対しては加点をして評価したものの、取得している技をいかに美しく丁寧に実施しているかを評価の基準とした。当講評は審判員3名にて意見を交わし合って作成したものである。

【C1・C2クラス】

伸腕伸膝後転直ちに前屈左右開脚座において肘曲がりが目立つ選手がいた。また、後転から足裏で一旦止めてから開脚座に持ち込む選手は無価値な運動として、直接開脚座に持ち込んでいる選手との格差を0.1つけた。伸腕で直接開脚座に持ち込むような捌きを目指してほしい。

前転とび連続の膝の減点のない選手や、後転とび連続の足割れ・スピードの減点のない選手は少数であった。跳躍系の基礎となる運動なので、膝や足割れに注意して練習してほしい。

【B1クラス】

2 節及び最終節の跳躍系の捌きに関しては C クラス出場者よりも卓越した実施をする選手が多かった。最後の抱え込み宙返りの高さや体の開きについては減点のない選手はおらず、スピード感ある後転とびから高さのある宙返りの中でしっかりと体を開くさばきを目指してほしいと感じた。今回は着地が止まった選手には加点を与えたが、体を開いて着地取りをおこなってほしい。

後転倒立から直接開脚座は、後転倒立の肘曲がりや反って倒立になる捌き、倒立位になる前に開脚してしまう捌きも目立った。しっかりと倒立位経過ののち足を開いて開脚座に持ち込む捌きを目指してほしい。

【B2 クラス】

B 難度以下 6 技と特別要求のルールであり、体の締まった演技と着地を止めにくい姿勢を評価するよう心掛けた。良い演技の中で着地を止められず、着地減点で得点を伸ばせない選手も見受けられた。倒立においては全クラス同様 2 秒静止で加点、止められなければ実施減点と格差を持たせて序列をつけた。A クラスを視野に入れ姿勢の良い宙返りの連続やひねる技術を高めてほしい。

【A クラス】

難易度の低い技を 8 技やるだけなら B2 に出ると変わらないので、良い捌きで高い難度を取り入れた演技構成を評価の基準とした。特に後方 2 回宙返りや C 難度以上の跳躍系を組み合わせた連続技、実施の素晴らしい脚上挙等を評価した。素晴らしい姿勢で「テンポ～後方半ひねり～前方半ひねり」と着地までまとめた 3 連続タンプリングを実施した選手もあり、ほとんどの選手が中体連一部の自由演技や高校生になった時の演技を意識している構成で実施していた。

高校生になる上で実施 (E スコア) を崩さずに D スコアを上げていく練習に臨んでほしい。

【気になった点その他】

全クラス共通で倒立が止まったかどうかで 0.2 以上格差をつけました。ゆかにおいては着地する局面が多いので、倒立と着地を意識して練習してきた者が高得点に結びついておりました。

【 円馬・あん馬 】

主審 菅戸 秀俊

一審 津川 英樹

二審 増田 淳史

<C2 クラス> 円馬で旋回 10 周

・打ち合わせで確認したこと

旋回の腰の高さ・スピード、よどみのない旋回の出来栄で格差をつけていくことを確認した。

○採点して気づいたこと。良かった捌き・悪かった捌き、多かった減点など。

全体的にスピードのある旋回が少なかったように思う。旋回のスピード（振り回せていない）→支持力が弱い、肩に乗せて押せていない。また、腰の切り返しが遅く、腰の高さと同様にそのような旋回では今後あん馬にいこうしていく際に苦勞することが予測される。

採点規則に「円馬から外れて着地をする」という減点が 0.2 まである。今回は、わずかに外れる選手は旋回をコントロールして着地していれば減点はしなかったが、明らかにコントロール出来ずに勢いのまま、外れて着地している選手は減点をした。これは上位下位関わらずにいる。腰の切り替え、抜きの手を早くついて旋回をコントロールして着地できるように練習していただきたい。

ただ、10 周を回せるレベルの選手の中で落下した選手は 3 名だけだった。どこの指導者も落ちないように旋回を回すことをしっかり取り組んでいる結果であると感じ、今後もまずは落ちないで旋回を回すことをしっかりこの時期に意識させていただきたい。その中で上位の選手は腰が高く、しっかり振り回すことができている、体線も素晴らしかった。

<C1 クラス>

あん馬でのポメルを外して縦向き旋回 10 周

・打ち合わせで確認したこと

旋回の腰の高さ・スピードなどで格差をつけることを確認した。

・採点して気づいたこと。良かった捌き・悪かった捌き、多かった減点など。

昨年変更になった縦向き旋回だったが、全体的にしっかり回せているように感じた。前を高くしているが、後が低くなる選手もいたので、腕で支持をして同じ高さで回すことを意識して取り組んでもらいたい。また、着く手の位置がずれている選手も何名か見られたため、角度による格差をつけた。手のずれも小さな頃から気をつけて取り組んでいくことで体が大きくなってきても気をつけて回すことができるので意識しながら取り組んでもらいたい。

また、つま先、膝がゆるんでいる選手もみられたので、つま先・膝まで意識した旋回を常日頃から心がけてほしい。

<B2クラス> 旋回6周

・打ち合わせで確認したこと

旋回の腰の高さ・スピード、あん馬への足タッチなど。

・採点して気づいたこと。良かった捌き・悪かった捌き、多かった減点など。

腰の返しが遅く、スピードもないため、あん馬に足を擦る、ぶつける選手が多く、抜きでの膝曲がり・足割れはほぼ全員に見られた。円馬からあん馬にこうしていくことは本当に難しいと感じた。

その中でも、腰が高い・スピードがあるという旋回も見られ、抜きでの足割れがわずかに見られたものの、その旋回を評価した。つま先・膝の伸びた旋回ができることが大切であるが、同時に技へとつながる腰の高さや切り返し、スピードのある旋回を意識した練習をしていただきたい。

<B1クラス> 旋回10周 正交差2回

・打ち合わせで確認したこと

旋回の腰の高さ・スピード、あん馬への足タッチなど。正交差をスイングして腰の高さを意識した実施をしているかで格差をつけることを確認した。

・採点して気づいたこと。良かった捌き・悪かった捌き、多かった減点など。

昨年から正交差の連続が入り、正交差に力を入れてきているように感じた。旋回と正交差を全体で見るとではなく、それぞれの質をしっかり見た。

正交差は、大半の選手が正交差1回につき中～大欠点にいたった。正交差を連続して2回続けることの大切さと大変さを感じた。支持をして押さなければ大きくなっていかないので、まずはスイングの反復を行い支持の強化・軸手に体重を乗せて押せるように練習をしていただきたい。

<Aクラス>

・打ち合わせで確認したこと

旋回の腰の高さ・スピード、あん馬への足タッチ、交差技をしっかりスイングして実施しているか。技の出来栄で格差をつけることを確認した。

・採点して気づいたこと。良かった捌き・悪かった捌き、多かった減点など。

旋回の質を中心的に見た。技をすることも大事だが、きれいな旋回をすることを大切にしてもらいたい。そしてきれいな旋回で技を掛けてもらいたい。また、Aクラスの選手の交差技もほとんどが中～大欠点であった。昨年に比べると意識して取り組んでいるように感じたが、交差技のスイングを旋回と同様に大切にしてもらいたい。

下りは下向き下りがほぼ全員だったが、角度が水平以下、または馬体を越えるときに下向きになっていない選手がほとんどだった。水平以上が4名と少ないので、下りの練習もしっかりしていただきたい。

演技構成は、A難度だけで演技を組んでいる選手とB難度以上を入れて通している選手の格差を付けた。特に移動系を入れてきた選手に評価をした。まずは技を8技入れてきれいに通すことが大事だが、それができる選手はB難度、C難度を演技に入れて通しをしていくことを目標としてもらいたい。

内容的にはシュテクリB2名、下向き転向（フクガ）9名、トラムロー1名、縦向き後ろ移動（1/2部分）1名、縦向き前移動（1/3部分）1名、下向き正移動下向き転向下り1名であった。今回はC難度を実施する選手がいなかったことはとても残念である。

Aクラスであれば、3/3前移動・後移動を入れるか、その前段階である縦向き1/2（1/3）前移動や縦向き1/2後ろ移動などを積極的に入れて欲しい。来シーズンに期待したい。

<総評>

旋回の質（腰の高さやしっかり振り回しているかなど）・線を中心に評価をした。支持をしてそれぞれの手に体重を乗せることで大きく振り回せることが、将来的に前移動、後移動や一把手上連続の技につながっていくために必要で、旋回の質がよくなければ今後、ある程度技を入れてあん馬らしい演技に発展していかないと考え採点を行った。

当然ながら、美しい体操も大事である。今回、膝・つま先が素晴らしいと感じた実施はC 2クラスの選手1名のみであった。

あん馬は体格などもあり得意不得意があると思うが、ジュニア期の選手達にはきれいに減点の無い旋回をすること、交差技を大きく振ること（腰が高く減点が少ない交差）を意識しての練習に取り組んでもらいたい。

【 つり輪 】

主審 大澤 裕史

1審 柴田 寛士

2審 山本 昌平

1. 打ち合わせで確認した事

(1) 採点指針について確認

(2) 加点について

ア 演技構成に対する加点

- ・優れた技や組合せに対して

イ 実施に対する加点

- ・雄大な振動技（懸垂振動、前方・後方懸垂回転、終末技等）
- ・つま先までしっかりと伸ばされた美しい姿勢
- ・肘が伸ばされた安定した倒立
- ・安定した着地

2. 採点していて気がついた事（良かった捌き、多かった減点等）

各クラス共通

- ・上位入賞者では、減点が少ない、着地まで意識した演技が行われていた
- ・演技前のウォーミングアップの時間（1人30秒）を守っていない選手が多い
- ・器械にとびつく際、脚の開きや膝の曲がりなどの減点が多い
- ・脚前挙の静止時間がやや短い（2秒静止が必要）

Aクラス（31名）

- ・上位者の演技構成

1位 ゆっくりと肩転位、後方懸垂回転、デルチェフ、前方懸垂回転、後ろ振り上がり、脚前挙、屈腕屈身力倒立、後方抱え込み2回宙返り下り

2位 ゆっくりと肩転移、背面水平、前方懸垂回転、後ろ振り上がり、脚前挙、屈腕屈身力倒立、後方懸垂回転、後方抱え込み2回宙返り下り

3位 ゆっくりと肩転移、背面水平、前方懸垂回転、後ろ振り上がり、脚前挙、屈腕屈身力倒立、後方懸垂回転、後方抱え込み2回宙返り下り

- ・参加31名中15名が技数不足（8技未満）であった
- ・2名を除いてA難度とB難度のみで構成されていた
（実施されたC難度の技 後方車輪2秒静止～1名、抱え込みヤマワキ～1名）
- ・倒立について
（構成に倒立が入っていない～2名、倒立を実施したが不認定となった～3名）
- ・終末技について

B難度 後方抱え込み2回宙返り～22名

後方伸身宙返りひねり～1名

A難度 後方伸身宙返り～7名

後方抱え込み宙返り～1名

B-1クラス (10名)

- ・8名が規定通りに演技を実施
- ・2名が倒立を屈腕で実施（肩倒立）
- ・肘を伸ばして倒立を行った演技には加点を与えた

B-2クラス (23名)

- ・上位者の演技構成

1位 ゆっくりと肩転移、後ろ振り上がり、脚前挙、屈腕屈身力倒立、後方懸垂回転、後方伸身宙返り下り

2位 前方懸垂回転、後ろ振り上がり、脚前挙、屈腕屈身力倒立、後方懸垂回転、後方伸身宙返り下り

3位 ゆっくりと肩転移、前方懸垂回転、後ろ振り上がり、脚前挙、屈腕屈身力倒立、後方懸垂回転、後方伸身宙返り下り

C-1クラス (21名)

- ・振動の大きさはあるが、運動面からのはずれ(スイングのブレ)があった選手が数名いた

1. 来年度に向けて

- ・懸垂振動技は単に肩を返すだけではなく、抜きあふりに加え輪を下に押さえた雄大な捌きを目指してほしい
- ・肘や肩が入り輪を開いた倒立や胸を張った脚前挙など、基本的な技においても力強さを表現できるような捌きを目指してほしい
- ・Aクラスにおいては、高校規則で要求される技（振動倒立静止等）についても積極的に取り入れてほしい

【 跳馬 】

主審 西村 祥

1審 小宮 拓人

2審 小林 葉月

《審判打ち合わせで確認したこと》

- ・第一局面での足の開き、肘の曲がり、倒立の姿勢などの姿勢欠点
- ・第二局面における、高さや姿勢欠点
- ・着地時での準備姿勢の有無

《試合中に起こった事例と対応》

- ・C2クラスで、突き手により跳び箱が倒れそうになるので、指導者（コーチ）が押さえることを許可した。

OC2クラス

クラス全体的に結果だけを見ると8点後半に選手が多いように見受けられるが、最高得点9.80と順位はつけられた。特に第二局面においては、明確な突き手による高さがある選手には0.3まで加点をし、高い評価をつけた。多かった減点としても、第二局面での低さに関連した減点（第一局面での振り上げスピード、突き手での肘のまがり、体のゆるみなど）であった。着地では、64人中18名が止めたことによる加点0.1が与えられた。また着地を止めた18名中14名が9点以上であった。9点台は今回全体でも23名だったため、9点台であった選手の半数以上が着地を止めていたことになる。

OC1クラス

C2クラス同様、ほぼ同じ基準で採点をした。クラス全体的にC2クラスよりも明確に差が出なかった理由として、第二局面での高さ不足があげられる。着地を止めたことによる加点は4名であったが、第一局面、第二局面での実施が加点に該当するものがいなかった。第二局面での突き手による浮き、雄大さを期待したい。

OB2クラス

評価のポイントとしては変わらず、第二局面での高さに重点置いて採点をした。実施減点として、膝の曲がりやつま先の割れなど基本的な個所が多かった。第二局面においても多くの選手（22名中15名）が高さで中欠点の減点があった。また着地以外での加点でも、0.2が1名（9.35）、0.1が1名（9.00）と加点に値する選手は少なかった。着地加点者を見ても、該当者6名であったが9点台はうち2名とこのクラスでは、着地加点がそのまま結果につながった選手は少なかった。

OB1 クラス

2本の平均点が得点であったが、どの選手も2本の得点に大きな差はなく、上手にまとめてきた印象がある。しかしながらB2クラス同様加点は0.2が1名（9.375）、0.1が1名（9.3）と飛びぬけてよい実施という選手は見られなかった。着地を止めたことによる加点者は、4名（うち3名が9点台）であった。

OA クラス

転回とび1名、転回1回ひねり7名、転回1回半ひねり1名、転回前宙1名、抱え込みツカハラ9名、屈伸ツカハラ6名、伸身ツカハラ6名であった。9点台であった6名の内訳は、転回1回ひねり1名、転回前宙1名、伸身ツカハラ4名であった。屈伸ツカハラを実施した選手の多くは、明確な屈伸姿勢ではなく、かなり大きな屈伸姿勢であったり、第一局面での足の開きの減点が目立ったため、9点台には届かなかった。また、他のクラスに比べ残念だった点として、着地を止めた選手がいなかったことである。難度を求められる中でも着地までしっかりと意識して取り組んでほしい。

【 平行棒 】

主審 澤田 雄介
一審 増川 運万
二審 山田 共彦 (ACクラス)
村田 浩一郎 (Bクラス)

①打ち合わせで確認したこと ②採点していて気づいたこと、多かった減点、良かったさばき
③ルールについて気になったこと ④質問されたこと ⑤来年度に向けて

○ C-1 クラス

① 審判員打ち合わせでは、規定演技と減点項目・加点について確認をした。とくに区分Ⅱ・Ⅲでの静止が求められる技において美しい姿勢が示されているかという点と、区分Ⅳ・Ⅴで実施が求められる支持振動におけるその質を中心に、正しく見極め序列をつけていくことを確認した。

区分Ⅳ・Ⅴでの支持振動における支持前振りは、肩の水平線を基準に足先が明らかに下がっているものを大欠点、水平程度を中欠点、30°まで上がっているものを小欠点とし、それを上回る雄大な実施を加点対象とした。ただし、足先のみを上げ脇の開きが不十分な実施に対しては未習熟の技術であるとし、中欠点までの減点をした。支持後ろ振りに関しても同様に基準を設け、前振りと後振りを合わせた支持振動全体の評価を行った。

また、区分Ⅲの伸腕屈伸開脚倒立（2秒）において実施したが倒立位まで達しないものや、バーを蹴って倒立に持ち込む実施については規定違反として1.0の減点で対応することも合わせて確認した。

② 全体の印象として、各選手に支持振動を大きく振る意識や演技を通し切ろうという意識がこちらに伝わってくるものであった。しかし、演技全体を通して肘や膝の緩みなどの姿勢欠点が多いように感じられ、また静止が求められる技に対してきっちり2秒止めようとする姿勢があまり見られなかったように感じた。

また、採点の際の減点・加点などについては、支持振動において「脇が十分に開かれている」と感じるような雄大な実施で、加点の対象となった選手は6名程度であった。やはりよくみられた実施として、足先は上がっているが脇の開きが十分でないものがあり、その点での選手間の格差はついたように思う。

また伸腕屈伸開脚倒立において、倒立位に持ち込む過程で膝・肘が緩んだり、不十分な屈伸姿勢のままさばく実施がほとんどであり相応の減点をした。

その他加点対象となったさばきは、脚前挙や倒立において美しい姿勢を十分に魅せていたもの、支持振動や終末の横下りの際に倒立位へのコントロールが明確に見えるものなどがあった。

- ④ なし
- ⑤ 来年度に向けて、レベルや年齢、体操暦などからそこまで高い水準を求めてはいけないのかもしれないが、将来発展技の習得や、競技力向上のためにも正しい技術での支持振動を目指して練習を積んでもらいたい。また演技全体をより丁寧に美しくさばこうとする姿勢を示してもらいたい。

○ B-2クラス

- ① 審判員打ち合わせでは、ルールの確認と採点規則に記載されていない技でどこまでを技として認定するかを確認した。打ち合わせで確認した技に関しては「後ろ振り上がり支持」「肩倒立」「懸垂前振り後方抱え込み宙返りおり」が挙げられ、それらは技として認定し相応する減点で対応するとした。その他の採点規則に記載されていない技については、その技が実施された際に協議し決めることとした。
- ② 多くの選手の演技構成が、け上がり～脚前挙～伸腕屈伸開脚力倒立、またはけ上がりの前に棒下宙返り懸垂を実施する選手がほとんどであったため、それらの技の熟練性や雄大さ、美しい姿勢などで差をつけることになった。
よかった実施としては棒下宙返り懸垂において引き手がきいて宙返りに浮きがあるさばきのもの、前振りひねり支持を実施した選手が全体で2名、うち1名は支持姿勢が45度程度で実施していたもの、伸腕屈伸開脚力倒立で持ち込みのリズムや姿勢がよかったものや、倒立ひねりなどで倒立位をしっかりと示したものなどがあった。

- ③ なし ④ なし
- ⑤ 来年度に向けては基本技であろう、け上がり～脚前挙～伸腕屈伸開脚力倒立の実施における姿勢欠点の改善を期待する。またそれらを踏まえた上で、多くの選手が似通った演技構成となっている現状を打破するような技の習得・実施や、卓越したさばき、真似することができないような美しい姿勢などを期待する。

○ B-1クラス

- ① 審判員打ち合わせでは、規定演技と減点・加点項目について確認を行った。演技全体の質や卓越したさばき、姿勢などをしっかりと見極め評価することを確認した。
- ② よかったさばきのうち特に印象に残ったものが、脚前挙において胸を張り、すっきりとした姿勢で足先まで神経がいき届いた素晴らしい姿勢を示したものであった。また支持振動においても脇が十分に開かれ、雄大に実施し、倒立位へのおさめの安定したものがあった。減点の多かったものとしては、支持振動においてその大きさが足りないと感じるものや、脇が十分に開けていないもの、スムーズさに欠け力を利用しているものなどがあった。また、区分Ⅰにおける「け上がり～」の部分においても腰の高さが不十分なものや、後振りが小さい、力を使っているものが多く見受けられた。

- ③ なし ④ なし
- ⑤ 来年度にむけて、支持振動の質を高めることを中心に強化を図ってもらいたい。支持振動の雄大性や、倒立位へのコントロールといった質が、将来 A クラスやその先の高校生、大学生となったときに発展技の習得や平行棒の競技力に大きく影響を及ぼすことが考えられるからである。あわせて、美しい姿勢が求められる体操競技であるため、基本となる、脚前挙や倒立における姿勢においても十分に時間をかけ、魅せる体操が体現できるよう強化してもらいたい。

また、終末の支持後振り～懸垂前振り後方抱え込み宙返り下りにおいて、倒立位まで到達するような後振りから懸垂宙返りが平行棒よりも高い位置に上がって実施されるようなさばきも目指してもらいたい。

○ Aクラス

- ① 審判員打ち合わせではルールを確認し、熟練性の加点については演技全体を通して倒立姿勢や脚前挙などの静止技が素晴らしい姿勢で実施されているもの、技のひとつひとつのキメ（演技のリズムの良さ、振動と静止のメリハリが良く、その静止の際の姿勢も美しく評価できるもの）が素晴らしいもの、姿勢良く、雄大さをもって演技したもの、着地を意図して止めたものを中心に行うことを確認した。

また演技構成に対する加点に関しては、採点規則において C 難度以上の価値がある技を実施し、なおかつ実施したその技が C 難度以上として認定されるものであり、安全性が保証されているものに対して加点を与えていくこととした。その他演技構成の加点に関することは疑問や C 難度未満でもその対象となるのではないかと思われるものが現れた際に、その都度話し合い検討することも確認した。

それらを踏まえ、演技の質と難度両方に対してしっかりと採点を行った。

- ② A クラスの演技について、演技構成の加点が与えられるような技の実施については、前振りひねり倒立を実施したものが9名おり、加点対象となったものは4名であった。加点対象とならなかった選手の実施は終末姿勢が肩と足先を結ぶ線が水平程度のものであったため技術不十分として加点対象とはならなかった。

また「け上がり開脚抜き倒立」の実施が1名いた。採点規則上 B 難度ではあるが、唯一の実施であったので加点対象とした。その他加点や評価したものは、倒立のキメ・姿勢が素晴らしいものや、ひとつひとつの技のキメが良いもの、また全体として終末技の着地を意図して止めている実施が多く、評価に値した。多かった減点としては、中間振動が挙げられる。選手が運動をコントロールできずに失敗として中間振動を行ってしまったのか、ルール認識不足からなのかはわからないが非常に多く見受けられた。また、前振りあがりにおける膝の曲がり、倒立位に持ち込む過程や倒立位での姿勢欠点も多く目立った。

- ③ なし ④ なし

- ⑤ 来年度にむけて、ジュニア期ということで選手、指導者にはひとつひとつの基礎技術の質・姿勢の向上を図ることを中心に取り組んでもらいたい。また、今後演技構成での加点を得て、より得点を高めるためにも、確かな基礎技術の上に応用技・発展技の習得、演技構成への組み込みも目指してもらいたい。今回 A クラスにおいて、ほとんどの選手の演技構成が似通っている傾向がみられた。もちろん基礎技術のさらなる習熟のために、より失敗を減らして得点を獲得するために、そのような傾向にならざるをえないのはわかるが、さらに上のレベルに上げていくためにも確かな基礎技術の上に応用技・発展技の習得、演技構成への組み込みを目指してもらいたい。

【 鉄棒 】

主審 加藤 大輔

1 審 澤井 智

2 審 木藤 景太

1. 打ち合わせで確認した事

- ・採点指針の確認～懸垂振動技における雄大さ、かつ美しい演技を評価。
- ・加点について～姿勢の美しさ、倒立を狙った大きなスウィング、懸垂前振りひねりの姿勢・捌き、安定した着地。
- ・減点について～角度、姿勢、ひねりのブレ、停止。
- ・車輪と中車輪の評価（Cクラス）

2. 採点していて気がついた事（良かった捌き、多かった減点等）

・Aクラス

全体を通して、多くの選手が一般ルールのEスコアを意識した減点の少ない、美しい演技を目指している印象を受けました。しかし、多くの選手が同じような演技構成をしており、シュタルダーひねり大逆手を行った選手を除いては全選手がA B 難度の技で演技構成し、手放し技を行った選手はいませんでした。技数については、数名を除いては8技要求を満たしていました。優勝した選手においては、姿勢の美しさ・スウィングの質・安定した着地を評価させて頂きました。

・Bクラス

B-1クラスは参加人数の少ないクラスであるが、ほぼ全員が停止することなく規定演技が通っていました。減点の多くは懸垂ひねりシリーズの角度・ブレ減点によるもので、取り分け、片逆手前振り・逆手持ち換えの際に水平程度までしか振れていない選手が多かったです。また、順手同時持ち換えの際に

しっかりと姿勢を作れていない選手も多く見受けられました。優勝した選手は、ほぼ全ての技が倒立位に収まっており、宙返り降りにおける高さ・着地準備についてもしっかりと出来ていました。

B-2クラスは自由演技であり難度・特別要求も少ない事から、ほぼ全ての選手が要求を満たしていました。その分、姿勢欠点等は厳しく減点しました。加点については、スイングの質やほん転倒立・フット倒立をしっかりと行っている選手、宙返りの高さや着地を止めた選手を評価しています。優勝した選手は、大振り・ほん転・フット倒立が全て倒立に収まっており、スイングの質も申し分なく、宙返りの着地もしっかりと止めにっていました。

・Cクラス

C-1クラスでは、大半の選手が規定を通せていました。減点が多かった点は大振り、ほん転倒立の角度、車輪からの1/2ひねりのブレ・角度でした。優勝した選手は、ほぼ全てが倒立に収まっており、1/2ひねりのブレもなく素晴らしい実施でした。

車輪からの1/2ひねりはツイストに繋がる大事な技なので、無理に大きさを求めずしっかりとスイングしてひねる技術を身につけて頂きたいです。

・C-2クラスでは、中車輪を実施した選手が約半数でした。大振り・車輪・1/2ひねり下りでの減点が大きく、下記の質問事項に対する回答でも記した通り中車輪では姿勢はきれいであっても、バーよりも方が上がってから手首を返して受けていないものについては大きく減点をした。また、停滞についても相応の減点はしており、全体的な平均点は低くなった。

一部の選手が前振り1/2ひねり下りについて、車輪を止めて降りながら1/2ひねりのような捌きを行っていたが、技の本質から外れているものと判断し昨年よりも厳しく大欠点以上とした。

5. 来年度に向けて

ほとんどの選手が、美しく着地まで意識した演技を心がけていると感じました。コーチの皆様におかれましては、引き続き選手のレベルアップに向けてしっかりとした基盤作りをしてほしいと感じました。

平成27年度の変更点について

1. 北海道ジュニア男子適用規則

①Cクラス鉄棒（加筆）

区分Ⅲについて、ほん転逆上がり(半車輪)と車輪の採点上の違いを解説に明記する

明記内容…①ほん転逆上がりで停滞する＝毎回－0.3

②ほん転逆上がりから懸垂前振りへのリズムが不良＝毎回－0.2～－0.3

③振り上げ時の減点(毎回)＝脚の曲がりや開き、腰曲がり、角度等

※なお、車輪を行う際の減点として、上記①②の減点がなく、③についても角度については最初の振り上げ時のみとなる

②C1、C2クラスあん馬、円馬の旋回の回数に対する減点について（変更）

現状：余分な旋回の回数に対する減点 1回につき－0.3

改定：減点内容の余分な旋回を削除

補足説明「余分な旋回に対する減点はないが、実施減点はおこなう」

平成28年度以降に向けた審議事項

平成28年度に向けた検討審議事項

①北海道のジュニアの方向性について（全道ジュニアAクラス）

・北海道中学校一部適用規則作成の方向性で検討中

※難度加点、または推奨技に対する加点など

②クラス編成（A・B1・B2・C1・C2）について

・クラス再編成を検討中